NEW CROWN　授業実践事例

BOOK 1　LESSON 1　授業例①

F.Y. 先生

指導計画表
（全 7 時間）

時間	学習内容・主な活動
1	・新出単語の発音の導入 ・ビンゴ ■GET 1 ・文法の導入 ・語句・表現の導入 ・本文の導入・理解 ・挨拶をする活動 ・まとめ
2	・ビンゴ ・前時の復習 ■GET 2 ・文法の導入 ・語句・表現の導入 ・本文の導入・理解
3	・ビンゴ ・前時の復習 ■GET 3 ・文法の導入 ・語句・表現の導入 ・本文の導入・理解
4	・ビンゴ ■WORDS & SOUNDS 1 ・発音の確認 ・カタカナ語との聞き比べ ・友達の電話番号を聞く
5	・ビンゴ ■We're Talking ・語句・表現の導入 ・本文の導入・理解 ・ペアでの暗唱練習

時間	学習内容・主な活動
6	・ビンゴ ■まとめ ・文法のまとめ ・自己表現につながる文章を書く
7	・単元テスト ・スペリング・コンテストに向けて単語練習

実践例

1.　この課でのねらい

小学校での外国語活動が行われるようになって，生徒が英語に慣れ親しむ機会を多く持つようになった。今まで聞いて，話すだけでよかったものが，読んで，書かなければならなくなり，評価されるようになることから，英語嫌いが増える時期でもある。外国語活動の楽しい部分を引き継ぎながら，基礎・基本の部分を身につけられるようにさせたい。ここで小学校と明らかに違う部分が「読む」や「書く」活動が入った事である。この課では読むことや書くことにしっかり取り組ませたい。また，学習を定着させるためにも前時の復習や単元の復習で既習事項を何度も確認させたい。

2.　語句の導入指導

このレッスンでは 70 語の単語を書けるようにしなければならない。WORDS＆SOUNDS 1 では 30 語の新出語句がある。ほとんどが数字なので，小学校でも慣れ親しんだものであるから覚えられるであろうという意図なのだろう。マニュアルの解説編では「一定の期間の中で定着を図りたい」とあるが，この後も新出単語は増え続ける。できるだけ早く身につけさせたいが，生徒にとっては負担になる。

そこで書かせて覚えさせたいところであるが，まだ英語を書くことに慣れていない生徒にとっては，単語を書くだけでも時間がかかってしまう。そこで，単語を書いてくることを宿題にするのだが，ただ書いて来いといってもなかなかできないのが中学生である。そこでビンゴで使う単語を新出語句でおこない，毎時間の宿題にすることで書く時間を家庭でとれるようにした。生徒もビンゴで使うという目的があるため，書くことを嫌がらずに書く習慣が身につく。

レッスンで使う全ての単語の発音を最初に紹介することで，ビンゴに使えるようにする。同時に単語の意味調べを宿題にすることで，各時間の単語の導入がスムーズなものになる。ビンゴのシートには発音と意味を書かせる。発音記号の学習を 2 年生で行うが，それまでは発音をカタカナで書かせる。カタカナで書くときに「オーストラリア」ではなく「オストレイリア」のように日本語表記にしばられないで，音に注目させたい。「グッド」ではなく「グゥッドゥ」などと工夫させるのもいい。単語の発音と意味がわかっていれば，予習することもできるようになり，意欲のある生徒には見通しのできる学習になる。ビンゴのやり方にはいろいろな方法があるが，私は生徒に私の言った単語をリピートさせながら，探すようにさせている。五感をフルに使った活動で，”BINGO.”と大きな声で言える雰囲気にしたい。（資料 1）

ビンゴで数回書き，発音も覚えたはずの単語も数日，数時間たてば忘れてしまうものである。覚えた単語を思い出す活動も定期的に行いたい。それがスペリング・コンテストである。

スペリング・コンテストは単語がある程度たまったところで行う。私の場合は 200 語程度たまったところで，その中から 100 問のテストを行い，上位の生徒を表彰する。その 200 語についても，ただ「テストをするよー。」と言っても全く勉強しないままテストを受ける生徒も出てくるため，授業の中で 20 問ずつのテストを 10 回行い，その後 100 問テストに挑戦させるようにした。（資料 2）

3.　文法の導入

私が文法の導入で一番使うのが，インタビュー活動である。インタビュー活動ではコミュニケーション・ギャップに驚きがあることが大切である。沢山の小学校から集まる中学校では，何も工夫しなくても，自己紹介に驚きが生まれ，ドキドキ感がある活動になる。しかし，中学校に一つの小学校からしか入学してこない場合は，全員の名前を既に知っているために，自己紹介ではインフォメーション・ギャップが生まれない。

そのような場合，ミドル・ネームをつけて，自己紹介するような活動はどうだろうか。英語の名前をつけるだけでも雰囲気が盛り上がり，さらに，英語の名前の場合，スペルが思い浮かばないので，相手

の言うアルファベットをしっかり聞かないとならない活動になる。（資料 3）

WORDS & SOUNDS では電話番号を言うだけでなく，聞きあう活動がいいのではないかと思う。資料 4 は教科書 22 ページの 3 の代わりの活動に使えるのではないだろうか。

4.　本文の理解

英語の文章をどれくらい理解しているか，確認するためには，内容についての英語の質問に，英語で解答させることではかることができる。私の学校では，英語を話したいと意欲を持っている生徒と，小学校で既に話すことに恐れを持っている生徒がいる。英語で質問されると生徒はとても緊張するようである。もちろん私も緊張します。同時に英語で答えられた時，生徒に充実感が生まれ，体験的に理解につながる活動となる。

“Do you like sushi?”と聞けば小学校での学習がしっかりできているならば，全員が”Yes.”や”No.”と答える事はできるのではないだろうか。しかし，”Is Emma from Canada?” と聞くと，半数ぐらいの生徒が ”No.” か ”Australia.” と答えるが，半数は黙ってしまう。それは，その生徒にとってエマがどこの出身かわからないわけではなく，間違いを怖れているため，自分の考えていることが合っているか心配だからである。この怖れを取り除くことがこの時期には大切であると考える。

「エマはカナダ出身ですか。」と，日本語で問えば全員の生徒が「いいえ」と答えられるのではないだろうか。まずは怖れをとり，その同じ質問を次の生徒に英語で行う事で，全員の生徒が英語で答えられるようになる。次の学習指導要領から英語の授業を英語で進めるとなるようであるが，どれくらい理解しているかをしっかり把握しながら進めていく必要がある。そのためには，日本語で質問することも混在させていきながら，英語で問答をする習慣を身につけさせたい。

私の場合，本文を読んだ後，座席の前から順番に日本語で五問程度の質問をしてく。そのことで，内容を理解しているか確認する。その後次の生徒に同じ質問を英語で行うことで 10 人程度とは話すことになる。英語で先に質問をするか，賛否が分かれるところであろうが，私の考えでは間違う要素を極限まで減らしたいのである。挑戦させる気持ちを育てるためには英語の質問だけでもいいのではないかとも考える。授業では常にドキドキ感を持たせたいものであるが，過剰になりすぎない加減が難しい。

先ほどの質問は，be 動詞の is が導入されていない段階である。しかし，外国語活動で培った力を考えると話す能力に関しては十分鍛えられていると考えるため使用した。正答は”No, she isn’t.”であるが，そこまでは求めず，”No.”と言った瞬間に”That’s right.”と言って褒めるようにした。もし，”No, she isn’t.”と答える生徒がいたら，”That’s a perfect answer.”と驚き，褒めたいものである。もし，その質問が既習事項だったとしても，”Yes.”や”No.”や”Australia.”のワン・ワードアンサーを”Good.”といって褒めてあげたい。そこには生徒がドキドキを越える勇気をもって取り組んだ結果だからである。しかし，既習事項の場合は完全な正答も確認しておかなければならないため，”What’s the perfect answer?”と言って全生徒に呼びかけ，理解している生徒から答えを聞き，全員で確認させたい。

次の授業で前時の復習を行う時にも同じ質問を行うことで，内容を理解したか確認する。前時とは別の生徒に聞くことで，英語の質問に英語で答えることを自然に行える雰囲気にする。

このような活動で身に付けたものを単元テストや期末テストで確認することで，授業とテストをリンクしたものにする。

5.　ペアでの暗唱練習

We’re Talking の扱いは 1 年生に指導するには難しいことがある。3 年生ぐらいになると，会話に自由度が生まれ，バリエーションが多い活動になる。しかし，1 年生の特に最初の段階での会話活動の指導はパターンが決まったものになる。そこで生徒に挑戦させたいのがペアでの暗唱である。謝る表現と，call の使い方は説明が必要であるが，その他は既習事項なので理解するのに時間はかからないと考える。そこで，読むだけでなく，暗唱までできれば，その場面の対話がどのような考えで進んでいくか，理解が深まると考えた。ペアでの暗唱の場合，覚える量が，半分となるため，取り組みやすくなる。

ペアでの暗唱練習は，左右の生徒で役割を決めて行う。同じ生徒と何度もやるより，違う生徒と行うことで効果が上がると考えた。右側にいる生徒はそのままにして，左側にいる生徒だけが移動することでペアが変わっていくようにした。この時，教科書を見てしまう生徒がいたため，教科書を見ないで，もしわからなかったら相手に教えてもらってもいいことにした。どちらもわからなくなってしまうこともあったが，ペアを変えていくことで徐々にスムーズな活動になった。また，左右の役割を交換して行うことで，理解を深めた。

6.　Mini-project 「自己紹介をしよう」にむけて

LESSON 1 から 3 まとめの活動として，Mini-project が設定されている。この活動に向けて，また，3 年間の英語活動をまとめていくために，各課で習得した表現を自分のものとして表現活動で使えるようにしていかなければならない。そのために語彙や使える文章を蓄積できるようにしたい。

今回の学習指導要領の改訂で，必修とされる英単語は，従来の 900 語程度から 1200 語程度に増えた。しかし，中学校で指導できる語は限られ，生徒の身の回りの物すべてが網羅できるわけではない。また，指導段階もあり，中学で学習する単語であっても 1 年生にとっては，まだ未習語が多く，身の回りのことを伝えるだけでも，既習語だけでは足りなくなってしまう。例えば，生徒が好きなものや嫌いなものなどを紹介したいと思った時に，その単語をまだ習得していないことが多いので，辞書で調べ，単語や語句を習得していく必要がある。また，教科書ですでに出ている表現であっても，生徒が自己表現するための文を考える際，どの文を使って表現すればいいのか悩む生徒も多い。そこで，既習表現の中に自分の情報を入れた文を蓄積していくこと（I like apples.のリンゴの部分に自分が本当に好きなものを入れた文）が，教科書を見ることに比べ，さらに身近な表現となり，自己表現に有効な手立てとなると考えられる。さらに，自己紹介や友達の紹介で書いた原稿など，生徒が今まで書きためたものが，次の表現活動に使える蓄積へと変化する。そこで各課で使った表現を自分の立場に置き換えて書き換えたものを準備する。各課の最後にまとめとして書かせる。その課で学んだ文法事項を含む文を 5 文程度書くと，1 年間で 40 文程度の蓄積となるはずである。

蓄積した文章を使わせた結果，Mini-project ではほとんどの生徒が 40 語程度のまとまりのある文章を書くことができた。また，生徒の意見からも，「一度書いてあるので，簡単に書けた」と言うものがあった。（資料５）

7.　振り返って

ここではスペリング・コンテストを計画に入れているが，これは後付けである。昨年度一年生に指導した際，インタビュー活動などはとてもスムーズに行うことができ，また，教科書の内容理解もスムーズに行うことができた。このことから，外国語活動が進んだために生徒の能力が高まったように感じられた。しかし，ペーパーテストを行ってみると，以前の生徒とほとんど同じ平均点になっていたのである。生徒の解答を見てみると，理解の能力や表現の能力を見る問題では良好な結果を示していたが，英文や単語を書いたりする際に多くの間違いがあった。このことから，大まかな理解はできているものの，正確な知識が身についていない生徒が多くいることがわかった。生徒にとって英語は楽しい活動で，簡単なものとしてスタートできたことは良かったが，正確な知識が身についていないために，成績に伸び悩む生徒が多かった。そこで，スペリング・コンテストを行うことで，学習を補充できるようにしたのである。生徒も意欲的に単語練習を行っていたので，最初から計画しておけばよかったというのが私の反省である。

語句や自己表現に使える文をしっかり蓄積していくことで，Mini-project での自己紹介がスムーズに行えたことは良かった点である。LESSON1～3 を一つのまとまりとして考えて，構想していく必要がある。年々変わっていく外国語活動で培った素地を見極めて，3 年間の最初のレッスンを生徒の理解を確認しながら，進めていく大切さを改めて感じた。